

もう「元ヤン」と言わせない

【あらまし】

家庭内で両親が衝突した時、小学生の女の子はどのようにして、そのケンカを止めようとするのか。家庭で暴力をふるう父親、それに不満を言う母親の間に入り、どうにか家族崩壊をさせないようにしようとする小さな女の子の心の描写。そして、その女の子が成長し、自立する中で、家族を無視して非行の道に入る。

しかし、心の支えになってくれた母方の祖父の期待に応えようと勉強をし始める。母親が病気になった時、弟が自分と同じ不安を持っていたと気づき、弟を思いやるしっかりした姉に変化する。家族崩壊が起こりそうな家族の中で、たくましく生きる少女の心の成長が生き生きと描写されている。

●小見出し

父が相談なしに大借金
私に八つ当たりする母
私立中学を受験して現実逃避
歯車がズレ始め不良に
弟の一言に泣いた日
自立への道
母のようになりたくない
努力をすれば這い上がれる

父が相談なしに大借金

「俺の稼いだ金を俺の好きに使って何が悪い！」

聞きなれた怒声が、家中に響き渡る。

「それが親の言葉か！ 何考えてるのよ」

ああ、また始まった。もつと幸せな家庭に生まれたかった。怒声が響き、物が壊れる音がすると、私はひしひしとそう思った。もつと明るい、「帰る場所」にふさわしい家庭に生まれなかった。

私の家はごく一般的な家庭かと問われたら、たぶん「否」の部類に入るだろう。父は酒もタバコも賭け事もしない。外面(そとづら)がやけに良くて、はたから見たら「良いお父さん」だと思う。母もそれに騙された一人。

父の妹、つまり私の叔母は悪魔みたいな人で、父は自分の母を守るために、その悪魔の言いなりになっていた。私は物心つく前から、何か自分の知らないところでふつふつと沸き上がる物を感じていたようだが、それが私たちの目の前に襲い掛かつて来たのは、父方の祖父が亡くなつてからだ。

叔母は、一人になった母親を引き取る代わりに、長屋を切り取っただけに過ぎない自分たちが生まれ育ったボロ屋を改築する資金を父に要求してきた。父はそれを勝手に承諾し、母にはまったく知らされていなかった。それが分かったのは最近で、それまではこれといった趣味もない父がなぜ多額な借金をしたのか、まったくわからなかった。ただ、暴力と罵声に怯(おび)え、明日の生活に不安を抱え続け

る毎日。今も年に数回、祖母の住む叔母の家を訪れると、真新しい部屋に私は怒りがこみ上げてくる。

父と母はいつもお金の事で言い争いをして、母はすぐに手を出す父に殴られていた。それを止めに入る私も同じように殴られた。あの頃の事は誰一人として口にはしない。上から塗り潰すように、誰も触れない。しかし、家の壁はあちこち陥没しているし、私の額の奇妙な凹みも消えない。「逃げるな」と主張しているように見えた。だから壁は掛け軸や写真で、額は前髪で上から塗り潰す。それも一つの生き方だと、思っていたから。

私に八つ当たりする母

小学生の頃、私の耳に入るのは「しゃつきん」、「ほけんきん」、「おかね」という言葉ばかりだった。飛んでくるのは怒声とそこら辺にある物という物。父に熱湯をかけられ、皮膚がただれたこともあった。熱いし痛い。凄く寒い。父は父で、自分じゃない者、という意識が最高潮に達した瞬間でもあった。もしも娘の私が死んでも、この人の身には何の支障もきたさない。所詮、親子という血の繋(つな)がりはあるても他人なのだ。

母は父の性格を痛いほどわかっているのに、ねちっこく何度も何度も同じ事を愚痴る。それが父の堪忍袋の緒を切ることを、第三者の私はわっていたから、

「やめてこれ以上言わないで！ 私が後から聞くから言わ

ないで……！」

そう心の中で繰り返していたが、最後は父の怒りに火がついて家の中が大惨事になった。

小学三年生ぐらいになると、私は父と母が言い合いになりそうな雰囲気は漂い出す前に、すかさず母の怒りを買うようなことをした。皿をわざと割って、

「お母さん片づけて！ 何なのこの皿！ あり得ない！」と癩癩(かんしゃく)を起こしてみたり、

「コンビニに連れて行ってよ！ 今すぐ！」

とわがまま娘になってみたりもした。母が私を怒れば、父はさつさといなくなってくれる。それが狙いだった。子どもの私が私なりに考えた、喧嘩の中断方法だ。

父をどうしようとはもう思わなかった。暴力をやめて欲しいだとか、勝手にお金を借りて逃げるのはやめて欲しいだとか。元をたどれば全て父のせいなのに、いつしか接する時間が長い母に怒りの矛先(ほこさき)を向けていた。母は、なぜ些細な事で、くどくどと父を責め立てるのだ。家が崩壊する原因は、むしろ母なのだ、と。

今は社交辞令を学び他人の前では明るくふるまえるようになった。しかし小さい頃は、愛想に欠けていた。母方の祖母からは、

「愛想はないし友達と遊ぶこともしない。あの父親の家にそっくりな変わった子だ」

と明るくて可愛い従姉(いとこ)と比べられては、煙たが

られていた。そう言われて母は良い気を持つはずがない。しかも私は父と瓜二つだった。その辺も、母が私に八つ当たりする原因だったと思う。私も母が大嫌いになった。

気を許せない。油断したら、信用したら、全部持っていかれてしまう。そんな殺伐とした空気と、何か一つでも傾いたら全壊してしまうような不安に駆られた毎日が、苦痛で仕方なかった。

だから、クラスメートが話す「普通の家庭」が凄く、凄くうらやましかった。「昨日お父さんが酔っ払って帰って来て絡んでくるからうっとうしかった！」とか、「お母さんが勉強しなさいってうるさいだ」とか、そんなごくごく普通の家庭に憧れた。それと同じくらい、私の家族の話に振られるのが怖かった。私は話せない。こんなに楽しそうに家族のことを話したりできないからだ。

私立中学を受験して現実逃避

私の事を知らない人がいる場所に行きたい。そう思ったから、小学五年生になった私は母方の祖父の経済的な援助を得て私立中学を受験することにした。私からしたら一世一代の決心。名古屋市内から遠く離れたこの田舎では、私立中学を受験する小学生など、私を入れて四人程度。片手で足りる人数しかない。周りにバレないようにこそそと名門塾に通い、日付が変わる時間に布団に入るとい生活が始まる。

私に通っていた塾は、毎週定期試験レベルのテストが行われていた。二回続けて上位十名に入れば、一つ上のクラスに昇進できるというシステムだった。テスト範囲はその週に習った単元のみ。それでも私はいつも、上位十位以内に入ったり、落ちたりの繰り返し。なかなか連続して入れず、六年生の秋、受験も大詰めという時によく昇進できた。塾に入った時から目を掛けてくれていたN先生が、「やったな！大したもんだ！」

と私の頭を撫で喜んでくれたのを鮮明に覚えている。凄く、嬉しかった。いつも「性格は暗いけれど、一人で何でもできて勉強もできる子」と言われてきたから、テストで満点を取っても褒められたことはなかった。母の関心は私の成績ではない。いつもお金だったから。だから、先生に褒められたことは私にとつて物凄く特別で、先生に「合格したよ！」と報告したいと強く思ったのだ。

このころも父は毎月母親のための多額の生活費を叔母に渡していた。出所は言わずもがな、借金。多重責務になっていた。家庭科の時間に「絶対やつてはいけませんよ」と教えられたサラ金での借金をこんな身近な人がやっている、という恐怖感に襲われた。しかし、今は年明け直前。試験までは一か月ほどしか残されていない。だから見ないふりをしてやり過ぎした。「考えない」、「今は受験が第一だ」そう言い聞かせて、耳栓(せん)をして勉強した。現実逃避。父が帰宅するリビングルームの話し声に聞き耳を立てた。エスカレ

ートしそうになると、殴られながらも両親の喧嘩を止めに入るものの、ほとんどの時間は外部の「音」を遮断して、目の前の現実から逃げ、数式と四字熟語の世界に身を転じた。そんな一か月が過ぎた二月。志望していたS中学の試験問題は、奇(く)しくも私の得意分野ばかり。二日後には合格通知が届いた。すぐさまN先生に報告すると、自分のことのように喜んでくれた。祖父も、

「制服買いに行こうな。学費のことは心配しなくていい」と言ってくれた。私は晴れて母の母校でもあるS中学生となった。

歯車がズレ始め不良に

この頃からだった。私は家庭から目を背け始めた。自分はその道を行く。それを応援してくれるのは父や母ではないけれど、ちゃんと存在するから。家の中は相変わらずだったけれど、その思いもあつて真面目に勉強して一年間を過ごした。

歯車がズレてきたのは、二年生に上がった時。私は八人くらの大人数のグループに属していた。しかし、いつも父に殴られていたからあざがなかなか消えなかった。それに目をつけた同じグループの子たちが徐々に私を避け始めたのだ。

「アイツの家、DVじゃない？」

「あざ、ヤバイよね。自殺とかされたらうちらにも疑い掛か

りそうじゃん。関わらんとこ」

わざと聞こえるように大声で話す、友達「だった」クラスメート。耳をふさぎたかった。私は自殺なんてしない。こういう家庭で育ったのだから「普通」をうらやんでも自殺をしようなんて思ったことなんか無い。そうは思っていない言葉にして伝えてしまえば、クラスメートに指摘されたDVを肯定することになる。気がつけば、私の周りには誰もいなくなっていた。一人で行動して一人で昼休みを過ごす日々。クラスメートの視線が怖くて、図書館に逃げ込むのが日課になった。

そのころ家でも、再び父が多額な借金を抱えていることが明るみになり、咎(とが)める母に反論できない父が一時的に蒸発してしまった。そんな時に、「クラスメートに無視されている」なんて、打ち明けられるはずがない。それに母に八つ当たりもされていたし、母が私を嫌っているのはあからさまな態度で知っていた。そんなこと打ち明けても、母は相手にしてくれないだろう。それに私も母が嫌いだ。かと言って、学費を援助してくれている祖父に心配を掛けるわけにもいかない。

「駆け込み寺」を見つけられない私。人生の歯車がズレ始めていった。

私が育った地元は柄が悪い。卒業式に卒業生が教師に殴りかかるといふ暴行事件もザラで、警察が待機しているくらいだ。深夜には暴走族が走り回っているし、ファミレスやコ

ンビニの駐車場には、髪を金色に脱色した不良たちが毎晩たむろっている。学校にいることも家に帰ることも億劫な私は、その仲間に入った。昔のように家庭の崩壊に怯え、食い止めようと夜な夜な悩み続けた私は、もういない。

まだ中学生だったけれど、小学生の頃よりは世間を知り、家庭が崩壊していても生きていく道があると知ったから、家のことなどどうでもよくなった。S中学に合格した時の、私を応援してくれている人がいるという気持ちで、徐々に歪(ゆが)み始めたのだ。私の中で都合よく、ねじ曲がり始めた結果だった。

それでも臆病者の私は、祖父を悲しませるのが怖くて学校には毎日行つた。学校には寝に行つていたようなものだったから成績は最悪だったけれど、「毎日学校に行く生徒」を演じ続けた。出合い頭で喧嘩はしていたけれど、退学にならないように飲酒と喫煙は断固としてしなかった。クラスメートの態度も、家庭も何も変わっていなかったけれど、地元に戻れば仲間がいる。そう思うだけで景色が変わった。いや、今思えば、変わったように見えた。あるいは変わったのだと思ひこみただけだったかもしれない。

「お前、真面目ちゃんだよなー」

「学校、ちゃんと行つてるんでしょ？」

「寝とるけどな」

「行つてる意味なくない？ 学校は勉強しに行くところだぞー！」

「お前が言うなよ、不登校女」

百円で買える五〇〇ミリのパック飲料をお供に、近所のコンビニの駐車場でよくこんな会話を仲間としていた。誰が何を言おうと私は学校に行った。行事がある日は、適当だったけれど、しつかり出席もした。この頃になると、クラスで物静かな子たちと多少ではあるが交流していたが、学校の大人たちもクラスメートも私の異変に気付かない。ピアスは増えても、私が変わるのは地元に戻ってからだから。

「お前、見ねえ顔だな」

「おめえらみたいな田舎モンじゃないからさ、ここら辺のガッコーには通つてねえの」

「……なんだと？」

「田舎モンには難しい日本語わかんねえ？」

わざと挑発する言葉を選んで神経を逆撫ですること、優越感を覚える。拳（こぶし）が飛んできたら、小さい頃に習っていた剣道の技（わざ）を自分なりに応用して倍返し。楽しい。思い切り自分の感情をぶつけて、思い切りブン殴って、スツキリした気分が家に帰る。非生産的な日々の繰り返し。毎日深夜までぶらついて汚い言葉と拳で喧嘩して、自分は強いと思っていた。誰かに喧嘩に勝って、名前が有名になるにつれて一人で生きていけると思っていた。

もし戦国時代に生きてたら、大将も夢じゃないような気がして、生まれる時代を間違えたな、なんてことも思っていた気がする。勝手に剣道の技を喧嘩に応用して、武士道の

風上（かざかみ）にも置けない端（はし）くれ者のくせに。今思い返せば、自分の頭の悪さに笑える。

弟の一言に泣いた日

そんな日々が続いた、中学三年に上がる冬。母が癌（がん）になった。幸い早期発見であったために、手術で摘出すれば問題はないという。しかし数か月入院は余儀なくされる。「姉ちゃん、俺、しばらくお父さんと二人なの？」と問い掛けてくる小学生の弟を放つて遊びに行けるはずもない。私がない間に父の暴力が、細くて小柄な弟に向いてはならない。私が守ってあげなきゃ、と強く思った。

それから学校が終わると家に直帰する毎日が続く。弟とは昔から仲良しで、こんな家だったから、二人で何かすることが多かった。たまに祖父母が様子を見に来てくれたりもしたし、父はあまり帰って来なかったから、二人だけで協力して暮らしていた。

一度だけ祖父母の近所のがんセンターに入院していた母の見舞いにいったことがある。

「迷惑ばかり掛けてごめんね」

泣きながら謝る母に、弟も泣いていた。

母の病気は、過度なストレスが原因らしい。惨（みじ）め。親の反対を押し切つてまで結婚した結果がこれか。私はやっぱり冷たいかもしれない。「お母さんは可哀相」と思えないのだ。愚痴られても、親の忠告を無視して結婚したのは自

分じやないか、と思つていたからだ。母の家は堅苦しい。反対を押し切つて結婚し、その上、子どもを抱えながら、「離婚します」なんていうのは通じなかつたようだ。父は離婚などどうでもいらしく、まったくそんなものには触れてこなかつたし、不思議と父からは、「離婚」という言葉は出てこなかつた。

その帰り道、

「姉ちゃんがいて良かった」

弟が電車の中で呟いた。

母に謝られても、父に殴られても泣かなかつた私は、その一言を聞いて目頭が一気に熱くなつた。少なからず、弟も私と同じ不安を抱えていたのだ。いつ崩壊するかも分からない毎日に怯えているのだろう。きつい性格をしていると小さい頃から言われていた私とは対照的な性格をしている弟。壊れていく世界を前にして怖かつただろう。この時、私は自分の都合だけを考へて、弟を一人にしたことを初めて悔いた。

春休み前に母の病氣は完治し、退院した。借金のことを知つた祖父が借金を肩代わりしてくれて、父は、勝手に借金をしないと約束していた。母は肩代わりしてくれた自分の親に少しでも返そうと、自分が作つたわけでもない借金のために仕事を始めた。

父は相変わらず何かを隠しているようだったが、母には父を名指しで責めないように説得した。だから暴力はプツ

リと止んだ。あの罵声と暴力が飛び交う頃が嘘のように、平穏な毎日になつた。ただお互いを干渉しない温かみのかけらもない家庭、とも言えるのが滑稽(こっけい)に感じられた。

自立への決意

私は、母の病氣を機に遊び歩くのを止めて、授業を真面目に聞くようになった。今思えば、弟と二人で「自分が大人になつた時に一人でも生きていけるようになりたいね」と話していたのが原動力となつたのかもしれない。幸せいっぱいであつた母を、不幸の穴に落としたのは「結婚」だ。だから私は、結婚と幸せをイコールで繋(つな)げることはできないし、いつでも末路を考へる癖(くせ)がついてしまつた。

でも、その癖が、勉強して大学に進学して就職し、自立する、という計画を私の中で鮮明に描くことを促したのだから、マイナスのイメージばかりではない。とは言え、遊び呆けていた代償は、決して軽いものではない。何せ英語は三人称の意味さえ分らないし、数学はマイナスとプラスの計算しかできない。幸い、三年生は英語と数学に限つて二年間の範囲を振り返る特別な授業が設けられていた。分厚い問題集を表紙やページがちぎれてしまふまで勉強し、どうしても解けないところは翌朝早めに登校して数学の先生をつかまえた。幸い中学を担当している先生は少人数であつたため、ほとんどの先生が顔見知りで、「ここがどうしても分

「からない」と言えば親身になって教えてくれた。

「この解説、何でわからん部分をあえて飛ばすのー、解説の意味ないし」

「山田さんは皆が分かるとこ分からんからでしょ」

「……だつて有理化とか知らんかった」

「だーから勉強せんで良いの?」つて言ったやん、去年」

「だつて勉強したくなかつたんだもん」

「まあでも、こんなにガリ勉になつてくれたで、先生付き合つてあげるよ。また分からんかつたらおいで」

仲の良い数学の先生が応じてくれて、こんな会話をしたある日、前の晩どれだけ考えても分からなかつた問題が解けた。しかし、足取り軽く教室に戻つたが、一つ、どうしても越えられない壁が立ち塞がつていた。私は元々暗記が得意しかし、書店で買つてくる社会系の暗記本などを電車の中で眺めていてもまつたく頭に入らなかつた。たった一年のブランクは、私から暗記という武器を奪い去つたのだ。どう覚えていいかわからない。どれだけ繰り返し見ても頭に入らない。得意であつたためにイライラ感は加速する一方。とうとうそのイライラが頂点に達して、暗記本をゴミ箱に投げつけてしまった。まさに八方塞がり。

悶々としていたまま英語の授業を受けた。しかしその時、先生の言った何気ない一言が私にとって神の言葉にも感じられた。

母のようになりたくない

「お前らいいかー? 単語は眺めるだけじゃ何時間押んでよ
うが覚えられんからな。とにかく自分の手で書けよ」

「これだ!」

そう直感した私は、自分なりの暗記ノートを作ることにした。授業中の板書と教科書の内容を踏まえた自分独自のオリジナルノート。読解力はそれなりにあつたし、中学受験の際、一秒でも早く問題に進めという教訓から培(つち)か)つた本文を斜めに読む技も持ち合わせている。それからといもの、私は帰宅するとその日の授業分の暗記ノートの作成作業に取り掛かつた。日本史、世界史、経済、英語に古文、化学など、数学以外の科目はすべてまとめのノートを作つた。絵が得意だから教科書などを見て図を書いたり、覚えるべき単語や用語は暗記本を真似て赤いシートで隠れるようにした。教科書や資料を一々持ち歩かなくてもそのノート一冊で完璧に勉強できてしまう、魔法のノート。同時に赤シートで文字がきれいに隠れるペンも発見した。

今思えば笑つてしまうけれど、当時の私は歴史に残る大発見で、「これは筆跡も浮き出てこないんだよ!」と得意気に説明したものだ。

その成果もあつて、成績は一気に上昇の兆しを見せ始めた。ちなみに私は高校に上がってもコツコツとこの一連の作業を続けて、仕舞いには「参考書なんかよりも凄く解りやすい」と友達の間では評判になり、大学受験をする子たち

が回し合いをして、私の努力の賜物を、最後の最後まで活用してくれた。

友達からは、「お前のそのノート、半端ない。私にはできないわ」とよく言われていたが、私はただ純粹に楽しかった。勉強をすれば、覚えれば覚えるほど、それが「点数」となって目に見える形でかえって来ることが嬉しいし、楽しい。そのためなら、寝る時間が三時間でも、週末は朝から晩までお尻が痛くなるまで椅子に座つていても、苦痛に感じることはなかった。

私の中にあるのは、「母のようにはなりたくない」という強い気持ちだけ。自立すれば、母のように病気になるまで旦那にへばりついていなくて済む。それと同時に、家の中にも何も気にせず自分のことに取り組める、という事実は多少なりとも嬉しく感じる事ができた。

一年で周りに追いついた私は、追い越す事に闘争心を燃やした。諦めていた大学にも、祖父が行かせてくれるというので、私は一番を目指した。行きたい学科のレベルなど関係ない。中学時代底辺だった私を、学費を出してくれているのに一度だって責めなかった祖父に対しての、せめてもの償いだった。結果、学年で十番以内の成績を修めて卒業した私を、祖父はとても喜んでくれた。大学も、祖父が厚意で行かせてくれているのに一日だって無駄にしたくないからサボることはしていない。

努力をすれば這い上がれる

今、私の家は本当に殺伐としている。母親との関係も相変わらずだし、父に到っては他人のように愛想笑いしか向けていない。

しかし、高校を卒業し国立大学を目指すために浪人している弟とは周りの友達に驚くくらい仲がいい。アニメとビジュアル系バンドが好きという共通の趣味を持っているためか、二人でよく遊びに出かける。昔、親戚からも、「二人はいつも、くつついてる」と笑われたくらいだ。姉と弟というより、気の合う友達、といった感覚で、殺伐としたこの家中、笑いあつて過ごしている。

私は家族がすべてだと思わなくなった。家族みんなが仲良しで、いざとなったら命さえも賭けられる、そんな家庭は今でもうらやましいと思う。けれど自分の力で自分を取り巻く世界はどうにでもなることを知った。応援してくれる人がいることも知った。だから、今はあの時のように、「もつと幸せな家庭に生まれたかった」とは微塵も思っていない。もちろん、生まれた家や家庭事情など、どうにもならないことだつてある。

今でも地元でたまに見かけるかつての仲間は、あの頃と何も変わっていない。でも、私は違う。そこから脱却し、変わることができた。授業を聞いて、高校のときとは違ってたくさん知識を学んで、地元に戻つて来たら、学校に通うための定期券代を稼ぐために働く。大学生を終わらせた

くない。「今」がすごく楽しい。それを手伝ってくれた祖父に、立派な社会人になった暁には、「ありがとう」と言いたい。

荒くれ時代に喧嘩のせいで差し歯になってしまった前歯も、恥ずかしい事だけれど、今では笑って話せる。努力をすれば這(は)い上がれることを知っている。

私は、自分がそうだったから、非行に走る子を正しい道へ導きたい、とは思っていない。自分で過ちに気がついて自分で這い上がるべきだと思っているから。たとえ「元ヤン」というレッテルが貼られても、すべては自分の責任。仕方がない。だから、そんなものをどうこう言わせない人間になりたい。それが今の私の大きな目標である。